〈入選〉
千葉県　杉本さん　（６０代　女性）

今、６４歳の私は年齢層も結婚後の歩みも似たり寄ったりの知人や友人たちから挨拶がわりに熱い視線を向けられる事があります。来年になると、老齢基礎年金の受給となります。その受給額について「あら、貴女、そんなに？いいわねえ…」と、その視線は遠慮の無いやっかみ混じりなのです。しかし、満更でも無い気持ちです。

ただ、その気持ちの先には、夫の今は亡き母が大きく関わっているのです。

私は昭和４０年代の半ばに結婚しました。その当時は今とは違って夫婦共働きは極めて珍しい事。結婚＝退職そして家庭の主婦というのが極、普通のパターンでした。

その私は結婚後間もなく国民年金に任意で加入しました。だが、当時は若かったせいもあってか、正直言って年金にあまり関心がありませんでした。また、私の周りで結婚後国民年金に任意で加入するような事は見も聞きもしませんでした。だから夫に言われるままに加入での保険料の納付書を目にする度にそれを他に使えたらとか、任意では別に入らなくてもと、恨めしくも思ったものでした。

ところが義母が国民年金を受給するようになったのと、昭和６１年の年金法の大改正を聞きかじり、私の任意加入の経緯を知って「義母が！」と、胸が締め付けられる思いでした。同時に遠き里（私は秋田出身）の両親がふっと微笑んだような気を覚えたものです。「…お袋だよ、年金は特に女にとって将来の命綱、本木だから、お前（夫の事)、酒、煙草を減らしてでも〇〇子（私の名前）さんを国民年金に何としても入れなさいって、何度も強く言われたんだよ…」と、苦笑混じりに照れくさそうだった夫の言葉は生涯忘れられるものではありません。

大正の半ば生まれの義母は国民年金発足保険料百円の当時（当時、保険料は百円）から加入したそうです。義母によると、当時昭和３０年代はどこの家庭も同じように生活がとても苦しく、主婦達は内職に追われ、青菜に塩の日々だったそうです。

だから、義母と同じ年齢層の主婦の大半は年金どころでなかったとの事でした。義母は自分が苦しい時は相手も苦しい、月百円はいかんせん重い「一日３円、一日３円、命綱…」と念仏を唱えるように、役場の職員と激しくやりとりを度々しながらも保険料を支払っていった、そうです。だから周り近所から「その年齢で年金が入るのだからいいわねえ…」とやっかみ半分で羨ましがられたと、笑いながら話した義母がつい昨日のように思い出されます。

その義母の「私に毎月多少なりとも決まってのお金（年金）があったればこそなんだよ。お父さん（義父）が入院なり施設行きでもなったら、それはお父さんの年金で賄うとして私に年金がなければ子供たちの顔色を窺っての生活で迷惑も掛けるし…助け合いの言葉は美しいけど、現実の毎日の生活となると生易しいもんじゃないからねえ…」と、しみじみとした口調は私の心に深く刻み込まれるのでした。

義母は連れ合いの夫を第四種被保険者制度（私には？）を使ってまでして厚生年金受給につなげた、と夫から聞かされたとき、私は制度を知っているのと、知らないでいるのとでは将来に大きな差が出るーと、つくづく思い知らされました。同時にそれがあったから私達だけでの暮らし向きが出来た、と義母に感謝するのでした。

義父母に年金受給があった事、また私も任意加入歴があるのは、恵まれた事だと思います。だからと言って、決して余裕の中から生まれたものではありません。義母の「命綱、本木…」をいつしか継承して来たからーとも思っているのです。

先達て某新聞に掲載の老後の設計という見出しがふっと目に止まりました。それによると、２０代では公的年金頼りは３８％で、公的年金だけでは不安だからと、民間の個人年金への加入云々…というものでした。

私はこと若い層は、公的年金制度がおかしくなれば、民間の個人年金がそれを充分に補ってくれるような思いを抱いているのではと、疑念を持ちました。公的年金＝国家なのですから、国家がおかしくなれば民間は個人年金どころではないのではないでしょうか。命綱、本木はあくまで公的年金に他ならないと思います。若い層は今一度そこに踏み込んでみたらーと思いつつ、私はそれを若い人達にメッセージしていくのが、義母への感謝に応える事だと思っているのです。そして、拙い一句を作ってみました「働けぬ、齢いとなりて、隔月に、思いこもごも、年金なれば」。